

# LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

## #10 プッチーニを訪ねて

### プッチーニとの出会い

オペラとはイタリア人の作曲家と歌い手によるのがその真髄であると思っている僕は、ヴェルディとプッチーニの大ファンである。とは言っても若い頃はオペラ好きではなかった。大学のオペラ科を出た母が、ピアノを前にプッチーニの「蝶々夫人」や「ラ・ボエーム」を毎日のように歌っていて、幼少の僕には結構きついのがあった。その反動からかいつの間にかアメリカン・ポップスに走り、小6の頃には気づけばジャズの世界にどっぷりと浸かっていた。今に至るまでジャズ好きは変わらず続いているが、そんなオペラの虜となるきっかけとなったのが、ヴェネチアのフェリーチェ劇場で観たプッチーニの「マノン・レスコー」だった。それ以来イタリアに行く

楽しみの一つがオペラ鑑賞となった。特にヴェローナのローマ時代の闘技場跡やローマのカラカラ浴場遺跡での夏の野外オペラでは、音と光の織りなす壮大なるスペクタクルオペラに心揺さぶられた。

冬のオペラシーズンは何と言ってもミラノのスカラ座だ。スカラ座近く、ドウオモ前のガッレリア地下にある本屋の奥のチケットオフィスでは、運が良ければ入場券を買うことができる。僕は根気強くチケットをゲットするまで通うこともある。日本では考えられない程安値だし、当日の立ち見席を手に入れることも可能だから、オススメの方法だ。

### アグリツーリズモ「Prunali」

イタリアのスーパーヨットビルダーFIPAグループのオーナーが所有する、プ

ッチーニの生家近くのアグリツーリズモ「Residence Prunali」に縁あって滞在した。アグリのあるマッサローザはFIPAグループの中核となるMaiora(マイオーラ)の創業地で、僕は30年ほど前に一度この造船所を訪ねていた。造船所でアグリを紹介してもらった時は何か不思議な縁を感じた。

コの字型に配置された建物の壁面には、プッチーニオペラの当時のポスターが描かれ、庭のプールの水面はトスカーナの柔らかな秋の日差しにキラキラと輝いていた。各部屋はそれぞれ、「トスカ」「ラ・ボエーム」「マダム・バタフライ」と名前が付いているが、僕は「トゥーランドット」を予約していた。60㎡ある部屋は茶のテラコッタ床に真っ白な漆喰壁が美しく、高い天井が気持ち良い。広いリビングの一角にはキッチンが配置され、ベッドルームとバスルームは別室だ。

ひと段落つくとリビング備え付けのマシンでエスプレッソを入れ、YouTubeでマリオ・デル・モナコの「Nessun Dorma(誰も寝てはならぬ)」に聞き入る。イタリアオペラ界の最高のテノールだったデル・モナコのことは子供心に鮮明に記憶に残っている。弾けるような美声のハンサムなイタリア人は、多分母の憧れのオペラ歌手だった



ルッカの広場で、タピオを片手に作曲の構想に耽っているようなプッチーニ銅像。右上は生家「プッチーニミュージアム」の一部に置かれた愛用のスタンウェイ(Steinway & Sons)。その下はヴィアレージオ郊外の湖に面した豪華な「ヴィラ・プッチーニ」との構図。すぐ隣の舟溜りには小舟やRBが保管されていた。



に違いない。一枚開くたびに鉄製の針を取り替えなければならない蓄音機で、母がよくデル・モナコのSPレコードを聞いていたのを思い出す。当時、僕は針替え係だった。そんなことを思い出しながら暫くデル・モナコの美声に酔いしれた。

### プッチーニの生家とヴィラ

ジャコモ・プッチーニはそのアグリからほど近いルッカ(Lucca)で1858年生誕した。プッチーニの生家は現在博物館として一般公開されている。街を取り巻く城壁をくぐり車を停めて街の中央広場に出ると、まずはプッチーニの銅像とご対面。そこから生家への道々にはプッチーニの名が

ついたホテル、レストランやオステリアが至る所に……。カフェテリア「トゥーランドット」までであるではないか。ルッカはまさにプッチーニ色の街という様相である。生家の博物館に到着前に、すっかりプッチーニ漬けになってしまっていた。

小さな博物館は小部屋が多く、それぞれの部屋は愛用のピアノや家具が置かれ、「蝶々夫人」や「トゥーランドット」の豪華な衣装も展示されていた。

ミラノで成功したプッチーニは晩年ルッカには戻らず、ヴィアレージオ郊外のトッレ・デ・ラーゴ(Torre de Lago)に、現在一般公開されている湖に面したヴィラ・プッチーニに居を構えた。僕は小さな舟溜

り前のベンチに腰を下ろし、葎が秋のそよ風にさわさわと揺れているのを心地よく感じながら少しの間思いを馳せた。プッチーニはこの舟溜りから時には小さな木造のボートで舟遊びを楽しんだのだろうか。そしてこの穏やかな風景を望み、湖面を通り抜ける風を感じながら作曲していたに違いないと。P.B.

### Profile

#### 伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に魅れることを至上の喜びとしている。RIVAとRBの熱烈な愛好家。



アグリツーリズモ「Residence Prunali」のトゥーランドットの構。二階のリビングからは一面に広がるオーリーブ畑を望む事が、収穫したての黒熟油オリーブオイルを、お土産にいただく。